

ブラジルの言語行動：「後日お礼を言うこと」について日系人を中心に

著者	熊崎 さとみ
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 9: 14-24(1997)
発行年月日	1997-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022416

ブラジルの言語行動

－「後日お礼を言うこと」について日系人を中心に－

熊崎さとみ

1. はじめに

ブラジルはポルトガル、スペイン、イタリア等を中心に、主にヨーロッパからの移民によって構成されている国であり、それぞれが独自の文化や習慣、食生活などを持ち込み、現在ではそれらを家庭等において継承したり、いくつもの文化が融合することで独特の文化を形作っている。日本からも1908年から約80年間で約24万人がブラジルへ移民し、現在約128万人の日系人が生活していると言われる。彼らはポルトガル語で社会生活を営む一方、家庭では日本語が飛び交い、また身近な食生活を例にとっても味噌汁や納豆、豆腐にこんにゃくといった日本のものとフェイジョン（ブラジルで常食する豆スープ）やファリーニャ（芋の粉）など、ブラジルのものとが食卓に並び、その他の生活習慣や行事など様々な面においても、日本のそれとブラジルのそれとが混在している。「ブラジルでは明治の日本を見ることができる」と言った人がいたそうだが、かつてはそれほどにも強固な日系社会を形成し、日本語・日本文化を伝承してきた日系人達であったが、時の経過とともに、日系社会の担い手が一世から二世、三世と世代交代を行ない、日系社会とブラジル社会との境界が次第に不明瞭になりつつある。

2. 研究の目的

上記のような生活の中で、移民である一世達が伝えようとしてきた「日本的」な言語行動も、日本人がブラジルに定住してからの歴史が長くなり、また二世、三世となるにつれて次第に日本人とは異なり、より「ブラジルの」な言語行動になってくる。いわば過渡期にある日系人の言語行動について調査し、考察することが本研究の目的である。最終的には、異文化に接触したとき、言語行動のどのような面が変わりやすく、また固有の、どんな言語行動がどのように保持されていくのか、という点にも注目していきたいと考えている。

3. 本論文の主旨とassumption

本研究は、1991年にブラジルと日本で行なったアンケート調査「言語行動の日伯比較」から始まる一連の調査の一環として行なった調査に基づいている。本報告は、そのうち、1996年にブラジルで行なった調査の一部についての考察である。調査では8つの場面についての質問項目を設けたが、今回はそのうちの2場面についての項目を取り上げる。

まず、調査に先立って行なった小規模の予備調査の結果と、これまでの調査の中で取り上げた同様の場面についての結果や、その他各種資料を参考に、今回取り上げる項目についてのassumptionを述べる。今回取り上げるのは、「友人にごちそうになったことのお礼を後日言う」・「友人にごちそうしたことに対してのお礼を後日言われる」という2場面についての以下の4つの項目である。(1)ごちそうになったことのお礼を後日言うかどうか (2)(1)の回答の理由 (3)ごちそうをした友人が後日何も言わなかった場合どう思うか (4)ごちそうをした友人が後日お礼を言った場合どう思うか これらの項目について選択肢を設けて質問した。これまで、(1)のように表出した言語行動に注目して調査・研究をしてきたが^{*註1}、言語行動の潜在する部分—その言語行動の動機付けとなる部分—にも注目していこうと、今回の調査で新たに(2)~(4)のような項目を取り入れた。

一般に、日本の社会ではこの様な場面で後日お礼を言うのは当然の礼儀としてとらえられていると言える。実際に、1991年に行なった調査でも日本人の大学生183名のうち「何も言わない」と答えたのはわずか1名であった。しかし、社会によっては「後日お礼を言う」ということが「次回のごちそうへの催促」ととらえられることもあると言う^{*註2}。予備調査でも、「ブラジル人にお礼を言うことはもう一度ごちそうしてほしい、という意味だそうなので（日系人には言うが非日系人には）言わない」という回答が複数現れたし、実際のブラジルでの日常生活においても同様のことを耳にした。そこで、この4つの項目のassumptionとして、以下の3点が考えられる。

- ①日系人インフォーマントの場合、相手が日系人の場合はお礼を言うが、相手が非日系人の場合はお礼を言わない、という回答が多く現れる。
- ②非日系人インフォーマントの場合、お礼を言う割合が日系人に比べて低い。お礼を言うことを「再度のごちそうの催促」ととらえている。
- ③日系人インフォーマントはお礼を言われなかった場合、相手が日系人の時より非日

系人の時の方が寛容になる。

一方、注意しなくてはいけないのは、①や③に関して、一世のインフォーマントの場合にはこういった意識が強いかも知れないが、二世・三世のインフォーマントの場合には必ずしもそうではない、という世代間の差がある可能性がある、ということである。実際、日系人の生活を見ると、二世・三世になると急激に日本語の使用率が減少する。日本語の使用頻度とともに、「日本的な習慣」も薄れているということは想像に難くない。

また、これらのassumptionと背中合わせの面があることも、考慮しなくてはならない。つまり、これらは、ブラジル人（あるいは外国人）の言語行動に対する日本人あるいは日系人のステレオタイプの解釈で、実際には非日系人の言語行動は日系人とそう異ならないという可能性もあるのである。例えば、国立国語研究所の調査報告^{*註3}でも、ブラジル人は次に会ったときにお礼を言う習慣がない、相手が日系人か非日系人かで（言語行動を）使い分けている、というインフォーマントの話がある一方で、日系人同士でも後からお礼を言わないこともある、ブラジル人でもそういった挨拶をする、という報告がある

4. 調査の概略

次に、実際の調査の結果を述べる。

(1)分析の対象となったインフォーマント

縁故によって調査を依頼した日系人185名とヨーロッパ系の非日系人138名。

(2)調査時期；1996年5～9月

(3)調査方法；留置式アンケート調査。ブラジルの共同研究者城セシリア喜美江氏に調査票を送り、配布・回収を依頼した。

(4)調査票の構成

日系人用（日本語版とポルトガル語版）、非日系人用の調査票を用意した。両者の差異は、日系人用では、相手が日系人の場合と非日系人の場合のそれぞれについて質問した点と、相手が日系人の場合は場面によって相手が日本語で言った場合とポルトガル語で言った場合を設定した、という2点である。場面設定・質問項目はいずれも同じである。日本語からポルトガル語への翻訳は日系人の翻訳家に依頼した。

(5)分析方法

データの処理は荻野綱男氏が作成した方言調査分析用プログラムGLAPSを用いた。
また、必要に応じて χ^2 検定（有意水準 $\alpha < 0.05$ ）によって有意差を検定した。

5. 考察

5. 1 Face Sheetの分析

(1)インフォーマントの属性

①性別	属性\性別	男性	女性	無回答	計	(単位：人)
	日系人	69	116	0	185	
	非日系人	34	103	1	138	

②年齢層と日系人の世代

空欄は0を表わす (単位：人)

世代	年齢層	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	無回答	計
日系人	一世		1	2	1	10	8	7	4	1		34
	二世	1	13	7	16	23	4	1			3	68
	三世	12	45	10	3	2						72
	四世	2	7									9
	不明		1					1				2
非日系		20	67	14	13	13	9	1			1	138

調査地の事情により、インフォーマントの属性は上記の通りばらつきが出てしまった。そこで、結果分析・考察においては数値的な面よりも、回答の動向・傾向に注目していくことにする。また、必要に応じて、性別の偏りなどが回答に影響を及ぼしていないかどうか統計的検定により、検定を行なった。

(2)日本語の使用状況

Face Sheetの中で、実生活での日本語使用状況について尋ねたところ、次のような回答を得た。まず、家庭内での使用言語は、インフォーマントの約40%弱が家族全員とポルトガル語のみで会話をし、同様に約10%が日本語のみ、もう約10%が日本語とポルトガル語を混ぜて会話している。そして残る約40%強が相手によって日

本語とポルトガル語を使い分けている（ただし、ここでは家族構成員が2人という回答から9人という回答まで全て同じ扱いをしたため、厳密なものではない）。年齢層別に見ると、20・30代がポルトガル語のみ、あるいは相手によって使い分けているが、年齢層が高くなるにつれて日本語の使用が多くなる。同様に世代別に見ても、三世→二世→一世となるにつれて日本語の使用率が高くなっている。家庭外では、インフォーマントの60%強が日本語を話す機会があると答えている。また、夢での使用言語は約60%がポルトガル語のみで、日本語のみと答えた約10%のほとんどは一世である。そして自分のこどもに対しては、日本語で話ができるようになってほしい、と約70%のインフォーマントが望んでいる一方で、約16%が日本語でなくても何か外国語を身に付けることを望んでいる。世代・年齢層に関わらず日本語を話せるよう望んでいるが、外国語を、と望んでいるのは若い年齢層を中心とする三世に多く見られる。

日系人の日本語の使用状況について、かいつまんで述べたが、これらをまとめると、理想としては日本語を身に付けてほしいと思っている反面、現実には日常において日本語が使用される場面は少なくなりつつあるようである。

5. 2 「後日ごちそうのお礼を言う」ことについて

続いて、各質問項目と結果、考察を述べる。

Q1 友人の家で、夕食をごちそうになりました。一週間ほどたって次にその人に会ったときのことを思い浮かべてください。

(1) あなたはその友人に「この間はありがとうございました」「この間はごちそうさまでした」など、お礼のあいさつをしますか。

1 しない・しないことが多い 2 する・することが多い

表1

(単位：人 ()内は%)

インフォーマント		日系人		非日系人
回答	相手	日系人	非日系人	—
しない		34 (18.4)	46 (24.9)	31 (22.5)
する		148 (80.0)	135 (73.0)	103 (74.6)
無回答		3 (1.6)	4 (2.1)	4 (2.9)

表2

		相手が非日系人	
		しない	する
相手が 日系人	しない	26	8
	する	19	125

(単位：人)

の部分は相手によって回答が異なるインフォーマント数である

表1には、日系人・非日系人各インフォーマントの回答を示した。日系人インフォーマントに対しては、相手が日系人の場合と非日系人の場合について尋ねたので、表2に、相手によって回答を変えているかどうかを示した。

これらを見ると、日系人インフォーマントと非日系人インフォーマントの回答にはほとんど差が見られない。しかし、日系人インフォーマントの回答に注目すると、インフォーマント総数の約15%ほどではあるが、相手が日系人か非日系人かで回答を変えているインフォーマントが見られる。ただし、その中には相手が非日系人の場合にはお礼を言って、日系人の場合には言わない、という予想外の回答も含まれていた。また、「しない」と答えたインフォーマントは、20代の若者に若干多く見られたが、全体で見ると年齢層・世代・性別による大きな偏りは見られなかった。

そこで、これらの回答の理由を尋ねたのが次の項目である。

(2) 上のように答えたのはなぜですか

1. 日本人の習慣だと思うから（非日系人の調査票ではこの選択肢は省いた）
2. 当然の礼儀だから
3. 教育によるものだから
4. 丁寧で、礼儀正しいと思うから
5. またごちそうしてほしいと催促しているようだから
6. 特に理由はない
7. 感謝やうれしいという気持ちを表わすため
8. 相手の親切に答えるため
9. ごちそうになったその時に礼を言えばそれ以上は必要ないから
10. （する場合もしない場合も、個人的な）習慣だから
11. その他

（※7以下は、「その他」に現れた回答にコードを与えたものである）

表3

(単位：人)

	相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	計
しない	日系	1	1	2	0	5	19	0	0	4	2	0	34
	非日系	4	1	3	1	4	24	0	0	4	3	0	44
	非日系	—	0	0	0	8	13	0	0	5	3	1	30
する	日系	32	43	57	4	0	2	2	0	0	0	7	147
	非日系	14	44	59	3	0	4	3	0	0	1	5	133
	非日系	—	7	58	1	2	13	6	1	0	11	4	103

表3には、(1)の回答の理由を示した。上半分は(1)で「しない」と答えたインフォーマント、下半分は「する」と答えたインフォーマントの回答である。

これを見ると、「お礼のあいさつをしない」理由は、相手に関わらず、いずれのインフォーマントも「6. 特に理由はない」と答えている。非日系人のインフォーマントに若干「5. 催促」が多く見られるが、全体に(1)で「しない」と答えたインフォーマントが少ないこともあって、はっきりした差は見られない。では、お礼のあいさつをする理由は、何だろうか。日系人インフォーマントの回答を見ると、相手に関係なく「2. 当然の礼儀」「3. 教育」に回答が最も集中している。それに対して非日系人インフォーマントの場合には「3. 教育」に回答が集中し、「6. 特に理由なし」

「10. 個人的な習慣」がそれに続き、日系人インフォーマントの回答とは少し異なった傾向が見られる。また、日系人インフォーマントは相手が日系人の場合の方が

「1. 日本人の習慣だと思う」と答えているインフォーマントが多い。ただし、これには「日本人の習慣だから、相手が非日系人の場合には言語行動を変える」場合と

「自分は日系人だから、相手に関係なくこの言語行動をとる」という相手の属性と自分の属性に動機付けをする両者が、同じようにこの選択肢を選んでいると思われるので、これは選択肢の工夫をするべきであった。

また、非日系人インフォーマントの場合には、年齢的な偏りは見られなかったが、日系人インフォーマントの場合には、挨拶をする理由は、20代のインフォーマントは主に「3. 教育」と答え、30代～50代は「1」「2」「3」に分散し、60代以上は、インフォーマント数が少ないが、「2. 礼儀」に集まっている。同様に一世の場合には「2」、三世は「3」にやや偏って回答し、二世は「1」「2」「3」に

分散している。

これらのことから、「後日お礼をするかしないか」という言語行動そのものは、インフォーマントの属性に関わらず現れるが、その言語行動の動機付けはインフォーマントの属性によって異なっているようである。

5. 3 「後日ごちそうのお礼を言われる」ことについて

Q2 友人をあなたの家に招いて食事をしました。一週間ほどして、次にその人に会ったとします。

(1) その友人が食事について何も言わなかった場合、あなたはどのように思いますか。

1. 何とも思わない・普通のこと
2. がっかりする
3. 礼儀を知らない人だと思う
4. 食事がおいしくなかったのかな、と思う
5. その他

表4 (複数回答) (単位：人 () 内は%)

インフォーマント		日系人		非日系人
回答	相手	日系人	非日系人	—
1. 何とも思わない・普通		1 2 5 (67. 2)	1 4 6 (78. 5)	9 4 (66. 7)
2. がっかりする		1 5 (8. 1)	8 (4. 3)	2 0 (14. 2)
3. 礼儀を知らないと思う		2 9 (15. 6)	2 0 (10. 8)	7 (5. 0)
4. 食事がおいしくなかったのかなと思う		6 (3. 2)	7 (3. 8)	4 (2. 8)
5. その他		9 (4. 8)	4 (2. 2)	1 3 (9. 2)
無回答		2 (1. 1)	1 (0. 5)	3 (2. 1)

これを見ると、いずれのインフォーマントも、「1. 何とも思わない・普通」という回答が最も多いことが分かる。しかし、日系人インフォーマントの回答を見ると、相手が非日系人の時の方が、日系人の時よりも「何とも思わない・普通のこと」という回答が多く、「2. がっかりする」・「3. 礼儀を知らない」という回答が少なくなっている。また非日系人インフォーマントの回答を見ると、日系人インフォーマン

トに比べ、「3. 礼儀を知らないと思う」という回答が少なく、「2. がっかりする」が「1. 何とも思わない」に次いで多い。

この項目では年齢差・世代差はほとんど見られないが、日系人インフォーマントの、相手が日系人の場合では、一・二世は三世より「礼儀を知らない」と答えた割合が若干多かった。

(2) その友人が、「この間はありがとうございました」「この間はごちそうさまでした」などのように言ったとしたら、あなたはどのように思いますか。

1. 何とも思わない・普通のこと
2. うれしい
3. 礼儀正しい人だと思う
4. またごちそうしてほしいのかな、と思う
5. その他

表5 (複数回答) (単位：人 () 内は%)

インフォーマント		日系人		非日系人
回答	相手	日系人	非日系人	—
1. 何とも思わない・普通		4 2 (21. 0)	4 1 (21. 0)	2 7 (18. 6)
2. うれしい		7 2 (36. 0)	8 0 (41. 0)	8 7 (60. 0)
3. 礼儀正しい人だと思う		7 7 (38. 5)	6 3 (32. 3)	2 6 (17. 9)
4. またごちそうしてほしいのかなと思う		3 (1. 5)	6 (3. 1)	3 (2. 1)
5. その他		6 (3. 0)	0	1 (0. 7)
無回答		0	5 (2. 6)	1 (0. 7)

表5を見ると、日系人インフォーマントの回答は、相手が日系人の時の方が、若干「3. 礼儀正しい人だと思う」が多いが、それほど大きな差は見られない。また、非日系人インフォーマントの回答は日系人インフォーマントの回答と傾向が少し異なっていることが分かる。そして、assumptionで述べたような、「お礼の挨拶」を「再度のごちそうの催促」というとらえ方はしていないことが分かる。この項目でも年齢・世代による大きな差は見られなかったが、一・二世は「3. 礼儀正しい人だと思う」

と答え、三世は「2. うれしい」と答えた割合が若干だが多いようである。

これら、表4・表5から、非日系人に比べて、日系人の方が「後日礼を言う」という言語行動を「礼儀」として受け止めているようである。また、非日系人もやはり後日の礼を期待している（少なくとも後からの礼に対して悪い感情は持っていない）、ということが分かる。

5. 4 まとめ

以上、それぞれの項目についての結果と考察を述べてきた。これらをまとめると、まず、assumptionの①については、日系人インフォーマントには相手が日系か非日系かで言語行動を変えている者が、顕著ではないが、見られた。一方、②とも関連するが、表出した言語行動に関しては非日系人インフォーマントの回答と日系人インフォーマントの回答は大きく異なるものではなく、この場面においては日系人が非日系人に対して言語行動を変える、というストラテジーは、必ずしも成功しているとはいいがたい。つまり、属性を意識しない言語行動であってもこの場面においては問題ない、と言えるだろう。

assumptionの②や③に関しては、「お礼のあいさつ」を「催促」ととらえているインフォーマントはごくわずかであったが、確かにこれらの場面に現れる言語行動の動機付けはインフォーマントの属性によって異なるようである。さらに、紙面の都合上世代・年齢層別の表は載せられなかったが、日系人インフォーマントの場合には、言語行動の動機付けの部分で世代・年齢層によっても異なることがあるようである。

これらのことから、ここで取り上げた場面では表出した言語行動については日系人と非日系人、あるいは日系人の間でも世代・年齢層によってそれほど差がないが、その動機付けである、潜在的な部分については差があると言えそうである。

最後に、この調査ではインフォーマント数が十分ではなく、またランダムサンプリングによって抽出したインフォーマントではないので、完全にブラジルの日系人と非日系人の言語行動を比較できたとはいいがたい。あくまでも限られた場面での、ごく一部のインフォーマントの言語行動であり、一つの傾向であると言わざるをえない。

【注】

- 注1 この結果は、第30回長野県ことばの会(1993.2)および平成5年度国語学会春季大会で口頭発表した。また詳しい結果は、平成4年度信州大学人文学部卒業論文「言語行動における日伯比較」、平成8年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文「異文化コミュニケーションにおける言語行動」で論じた。
- 注2 参考文献1, 2を参照
- 注3 引用した事例は、国立国語研究所所長・水谷修を代表とする新プログラム「国際社会における日本語についての総合的研究」の研究班2のうち、国語研究所グループによる調査で得られたものである。調査は1994年11月に実施された。予備的調査であるため調査結果は公表されていないが、ブラジルでの調査の直接の担当者であった国立国語研究所員・尾崎喜光氏の便宜により、データを閲覧する機会を得た。

【主要参考文献】

1. 野元菊雄(1985) 「あいさつ言葉の原理」 『日本語学』1985年8月号 明治書院
2. 馬瀬良雄・岡野ひさの・杵山あつ子・伊藤祥子(1988)
「言語行動の国際比較 -日本・韓国・マレーシア(マレー系)の大学生の挨拶行動を中心に-」
『現代人とことば』 銀河書房
3. J. V. ネウストプニー(1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店

【付記】

本稿は、平成8年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文「異文化コミュニケーションにおける言語行動-日系ブラジル人の言語行動を中心に-」の一部に加筆したものである。

資料収集にあたっては城セシリア喜美江氏とご家族に、調査票の翻訳には日比野ゆみ氏にご厚情とご協力を賜った。また多くのインフォーマントに調査に協力していただき、国立国語研究所尾崎喜光氏には資料を提供していただいた。各氏に記して深く感謝を申し上げたい。

(くまざきさとみ・信州大学助手)